

令和3年度第3回仙台市青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会議事要旨

日 時：令和4年3月4日（金）

13時30分～16時45分

場 所：青葉区役所7階会議室

出 席：島田委員長、青木副委員長、荒井委員、
小川委員、加藤委員、齊藤委員、
白石委員

※過半数の出席により委員会成立

1 開会

2 挨拶 仙台市青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会委員長 島田 福男

3 議事

(1) 議事録署名人選定 齊藤委員

(2) 令和3年度まちづくり活動助成申込事業 事業計画説明会

◇各団体プレゼンテーション

◇質疑応答意見等

① 特定非営利活動法人 珀杜

委員 昨年度初めてお聞きしたときはどのようにやられるのかなと思っていたが、スズメバチのことも含めて工夫されており素晴らしい活動が始まったと思う。次年度の予算の中にジオラマの作成が入っているが、これは今年度作って市民センターに置いたものとは別のものなのか、それともエリアを分けて2年間費用を割かれる予定なのか。

説明者 今年度団体が作ったものは800分の1で、来年度は150分の1から250分の1のもので生徒さんたちに作ってもらう予定である。その大きさなら木の一本一本までわかるようになる。もちろん部分的なものにはなるが、実際に観察した植物や生物を自分で印がつけられる大きさになり、楽しみながら実感を深められると考えている。全く同じ場所ではあるが、スケールの違うものを作る予定である。団体が作ったときの費用をもとに予算を計上している。

委員 それも市民センターかどこかに置いていただくのか。

説明者 市民センターにスペースがあれば置いてもらいたいが、私たちのような団体がつくったものを置いてもらうのと、学校の生徒がつくったものを置いてもらうのは違うと思う。今は青陵生が作り始めているが、後輩や他の学校の生徒などに製作の輪が広がっていけば、学校にも置かせてもらえるのではないかと考えている。

委員 なかなか学校関係にチラシを配布したり協力を仰いだりするのは大変だとお聞きしている。のびすく泉中央や、児童館などといった中高生の居場所もある。そういう場

所なら図鑑などを作ったり、また中高生のイベントへの参加のお手伝いもできたりすると思うので、学校に限らず中高生が来るような他の公共施設にもお声がけされるといいかと思う。

委員 ジオラマというと眺めるものというイメージがあったが、作ったものをコミュニケーションツールにして、生徒さん自身が説明できるようになっていくのがいい。学校やその生徒さんに近い場所などに置かれるのがいいと感じた。

それに関連して、今回図鑑を作られるということだが、ページ数は40ページとあるが、サイズはどのように考えているか。

説明者 A4サイズで考えている。品目が多いので、A4サイズの裏表で40ページあれば十分な情報を提供できると思い計画を立てている。相手が中高生であり、小学生に読み聞かせするようなものとは内容が変わってくるので、学名など一步踏み込んで興味を持ってもらえるような、生物の時間にも使えるような図鑑をと思い40ページにした。

委員 図鑑をどう使うかという点で、サイズもかなり重要かと思う。例えば現場に持って行って、そこにあるものを調べながら参照するような、ポケットに入れやすいハンディタイプの図鑑というものがあると思うが、A4だと現場で持ち歩くには大きい印象がある。現地で使うというよりは別な所でのコミュニケーションに生かしたいというお考えか。

説明者 若い子は現場に来ることがまずないので、学校などの教育機関で図鑑を手にとって見ることによって、こういうものがあるなら行ってみたという流れを作りたいと考えている。逆に森ではそういう本などを持たずに体験していくことが自然観察会の流儀だと思う。文献などにこだわらず実際に目で見て欲しいので、ハンディというのは考えていない。

委員 1回でその40ページに凝縮させるのがいいのか、2カ年に分けて内容を吟味するのか、あるいは最初はベーシックな情報にして、次の段階で別の種類が見えてくるようにするなど、作り方はいろいろあると思う。利用の仕方のイメージがあるようなので、今回想定しているものがあるのか、あるいは輪を広げていくスピードを考えると、量よりも関心層をとらえて、次のステップでさらに広がりを持たせるという、そのような編集の軸で制作する方法もあると思う。活動のステップや、今広がりが出てきているものに有効活用できるとイメージしたので参考にしてほしい。

委員 植物図鑑はいいと思っているが、予算の関係で部数やページ数を減らすことになるのは残念だと思う。部数を減らしてもそれほど金額は下がらないと思うし、ページ数を減らすとやりたいことに届かなくなるかと思うので、例えば2年がかりで制作するなど、そういうことを考えてもいいと思う。

それからもう1点、森が施錠をしたままになっているのが、初めのときから引っかかっている。できれば施錠が取れるよう学校側も認めてくれるくらい活動をして、自由に誰でも入るようになるのを期待しているのだが。

説明者 学校側はそれほど施錠にこだわっていないが、以前不審者がいたということで、やはりそこが心配になっている。我々も平日は働いているので基本土日しか森に入れないが、市民センターの館長と一緒に活動をしているくよみ研究会なども含めると、

月にすれば結構な回数を入っている。ただ生徒がまだ入ることがあまりない。一方で、山菜や野草をむやみに取っていく人もいる。森を育てたいと思っている我々のようなボランティアからすると、せっかくいい野草が生えてきたのに取られてしまうと、我々は記録しながら見ているので取られたのがわかるが、少し悔しい思いもある。施錠を取るというのは、あまりいいことだけではないので、学校側に施錠を解いてくれというのは急いでいないし、積極的には言っていない。施錠を取ったところで、元々森には入れてしまう。実は青陵生は施錠していないところから少しずつ森に入るようになっていて、気分転換に入ったり鬼ごっこをして楽しんだりしている。徐々に森に入る生徒が増えていって、学校の先生もそれを見て入るなど言うのではなく、逆にそろそろ鍵を開けようかと思っていただくようになるのを期待している。

委員 モラルの問題はあると思うが、そういう人はたぶん人目につかない所から出入りしていると思う。大勢の人が中に入って整備して利用していれば、そういう人は少なくなっていって、子供たちも安心して入れるようになると思う。できる範囲内で継続的に利活用していくのが一番いいと思う。

② 白沢カルデラプロジェクト実行委員会

委員 支出の費用等々の関係でお伺いしたい。基本的に助成金で古仙台湖の看板を作られることになるようだが、これは散策コースの3ヶ所に設置をするのか。金額は50万円あるいは30万円という金額になるのか。

説明者 経験を含めての話になるが、看板を作るのは非常に高額で、1枚だけで50~60万円かかる。古仙台湖のPRという面から、熊ヶ根に環境公社があり、その道路に建てようということで、環境公社からは了解を得ている。

委員 地層というのは最近注目を浴びている分野だと思うので、この事業がより多くの方に知ってもらいきっかけになればと思う。予算の中で看板が40万円と非常に大きな額になっているが、この40万円というのは積算根拠としてはどういったものがあるか。

説明者 以前取り組んだ、愛子宿めぐりの事業で、愛子駅前に看板を作ったことがあるが、この時は見積りが60万円だった。デザイン料や立てる時の工事などを含めてそれだけの額になっている。当時は資金がなかったので、地元の有志の土地を借りてそこへ建てたり、アマチュアの絵描きさんに愛子宿の縮図を書いてもらったりしてどうにか半値の30万円で仕上げた経験がある。その他にも、小さな鉄製の看板を安くしてもらって20万円ということもあった。我々としても展示会などを通して会員を増やして、できるだけ資金を調達しようと取り組んでいる。

委員 実際に設置するのは補助が出てからになると思うが、正式な見積もりがないと我々も判断しにくいので、一度業者と折衝されて見積りを取られた方が良くと思う。

委員 正会員が増えてきているということだが、正会員の賛助会費というのはどのぐらいいただいているものなのか、また何人ぐらいの会員で運営されているのか。先ほど純度の高いゼオライトが取れるということで、企業で新東北化学工業の名前があるが、団体の協賛金というのはそういったところからの協賛金なのか。

説明者 そういう形でもらう予定ではあるが、まずは展示会などをやってからということで、

まだ団体からの寄付金は全然入っていない。会員は 42 名で、賛助会員がそのうち 23 名である。正会員が実働部隊ということで、9 ヶ所回ったというのが現状である。今は展示会をやりながら会員を募集したり、講演会の参加者にアプローチをしたりといった形で、会員を増やそうという努力をしている。やはり地域の人に協力してもらわなければやれないと思っている。

委員 正会員が 19 人で予算として 20,000 円となると、約 1,000 円の会費ということか。

説明者 正会員が 2,000 円で賛助会員が 1,000 円である。第 1 回の総会では全部で 45,000 円集まった。2 年目に入るとということで、会員を増やす対策に取り組んでいる。

委員 団体の協賛金や寄付はまだ入っていないということか。

説明者 全く入っていない。目星をつけている団体は 4 社ほどあるので、これからお願いしに行こうと考えている。

委員 話を伺うたびに、こういう地域の魅力があるということを再発見しながら聞かせていただいている。現地に看板があることの説得力は大きいと思うが、その設置のタイミングが、今回がベストなのかという思いがある。会員を増やしたいという話があったが、この実行委員会を紹介するリーフレットやパンフレットのようなものはすでにあるのか。

説明者 会員募集のチラシを正式に作ろうということで、計画は立てている。

委員 そういったものにかかる経費は別に調達をするのか。

説明者 作るとなるとやはり金がかかるので、経費確保と並行して募集チラシを作ろうと取り組んでいる。

委員 看板で白沢カルデラのアピールをする方法もあると思うが、活動してリサーチした内容や、会員のことの説明も含めて PR するような、そういった簡易のリーフレットを作って広めていくことも活動のステップとしてありかと思う。応援する人の母数が増えれば、看板の資金調達方法のヒントにも繋がっていくと思う。協力する地域の企業や団体もあるかもしれないが、こういう地理的なことに興味のある人は広範囲にいらっしやると思うので、グッズと紐づけて資金調達に結びつけるなど、何か楽しみながら活動を広げたり、資金調達にも繋がるようなことのアイディアになったりするのではないかと思う。まちづくり活動助成の目的と、看板設置の馴染みがどのようにあるのかというところがポイントになると、お話を伺って思った。

説明者 この間、宮城西市民センターで展示会をやったところ、地元の人たちからぜひ一緒に回りたいという声があった。そういう面では非常に反響がある。

委員 そういう方ともコースなどのアイディアを出し合って、活動を広げていくということもあると感じている。看板は十分お金がかかる制作物であることは認識しており、少し感想も含めて意見させていただいた。

③ 一般財団法人 仙台 YWCA

委員 地域にいらっしやる高齢者のノウハウを知るのは大変重要なことだと思うので、ぜひ後世に伝わるようなやり方でやっていただければと思う。事業の成果として、各ワークショップを実施した結果出てくるものがあると思うが、そういったものをどのよ

うに活用するかという予定はあるのか。

説明者 手仕事はその場で楽しむことももちろんだが、そこで覚えた知識を家に持ち帰って続ける方もいる。震災の話を聞いたときにも、ただお茶を飲んでいるだけではなく手を動かすことで、生きがいを見つけられるという話があった。2年間開催できなかったが、例えば家で作ったものをYWCAで開催するバザーで売るということもできる。それから手仕事は方法の一つであり、そこで出会った人とのつながりが生まれることが一番大事だと思っている。YWCAは会館があるので、たとえば会館に寄って誰かと話したり、誰かと話さなくてもここに来て少しくつろいでいったりするような、そういう機会を作る窓口が今回の事業だと考えている。

委員 例えば、会館に写真ややり方を貼っておいたり、何かを冊子にしたり、動画に撮ってYouTubeで公開するなど、なるべく多くの方が知る仕掛けがあってもいいと思う。

それから、感染症対策についてはどうなっているか。

説明者 YWCAは高齢者が多いので、感染対策には昨年から大変気を遣っている。会館のホールは定員の半分以下で利用するようにし、検温や手指消毒、会館の消毒も徹底している。緊急事態宣言などがあった時は活動を中止にしてきた。落語会も本年度は2回やる予定だったが中止になっている。

委員 人が集まって何かをやるのが良しとされない時期なので、ぜひご注意くださいと思う。

説明者 今は特に飲食を我慢して、距離を取って活動している。講師の方にも飛沫防止パネルやフェイスシールドをつけていただいたりもしている。

委員 このおばあちゃんという点にこだわられるのは、YWCAという団体としてのミッション的な部分なのか、あるいは手仕事という部分で女性の方が得意であろうということがあってのものなのか。色々な災害研究の中で男性の孤立、どう男性を参加させるかが非常に大きな課題としてあった部分であるが、この事業では女性同士の世代を超えたネットワークというところを重視しているのか、実際は男性も参加できるのか、その呼びかけの仕方について伺いたい。タイトルはこのようになっていても、実際には工夫が必要になってくる点なのかと思うが、その辺はいかがお考えかを教えていただきたい。

説明者 YWCAは女性だけでなく男性も歓迎しており、実際にやっているプログラムでは参加者の半数ぐらいは男性である。今回おばあちゃんというタイトルをつけたのは、YWCAの今の会員が高齢化しておりおばあちゃんが多く、といってもすごく元気で素晴らしい方ばかりなので、そこが一番の強みということを出すために玉手箱とつけてタイトルにした。決して男性を排除しているわけではなく、男性の協力者もいる。他の事業ではおばあちゃんを前面に出してはいないが、この事業に関してはおばあちゃんが持っている経験を前に出したいと考えている。

委員 おばあちゃんの玉手箱というネーミングはインパクトがあって良いとは思う。おばあちゃんたちを中心にして地域で活動するのかと思ったが、プレゼンを聞いた限りではYWCAの活動の一環のように感じられ、まちづくり活動助成事業に応募した狙いがいまいち伝わってこなかった。活動の一環であれば、助成に応募しなくても今まで通りの

活動はできるかと思うが。

説明者 3回トライアルで行ったが、我々だけで閉じたことをするのではなく地域と繋がっていくことが、我々の使命だと考えて始めた事業である。自分たちが先生を呼んで楽しむのではなく、地域の若い子育て世代のお母さんたちに来てもらい、まちづくりに繋げていきたいという思いから始めている。今までやってきた事業とは違った形で、新しいまちのためになることは何かという考えでこの事業を始めている。

委員 地域の子育て家庭や子育て世代の方の交流の場ということで、講師の方がおばあちゃんになるというのは、すばらしい交流の仕方だと思う。参加費用を300円取るということになっているが、講師謝金代や材料費は助成金の方で賄っているのでは、参加者からお金を取るのは参加するハードルを上げてしまうのではと感じる。お茶菓子代となっているが、お茶やお菓子を出すよりは参加費がゼロになった方が、参加率が上がると思うが、予算の面では参加者からお金を取ることについてはどのように考えているか。

説明者 参加費300円というのは、何か参加するときに決して高い金額ではないと思っている。前回300円で実施したということもあるが、材料費などをすべて賄えたわけではなく持ち出しで行っていた。材料を持ってきてもらうのではなく、自由に使えるように我々でたくさんの種類を用意している。例えば自然素材のリースを作ったことがあるが、一般の教室ではそのようなリースを作ると2,000円から3,000円の金額で設定されているので、決して高い金額ではない。また今回の予算に関してはお茶菓子代となっているが、お母さんたちはとにかくお土産を喜ぶということを見習って先生から教わったので、人を呼ぶためのアイデアの一つとしてお茶菓子代の300円を設定している。

委員 お母さんたちの喜びの部分では、自分で選んだ本格的な素晴らしいものを手仕事で作れて、それを持って帰れたら十分嬉しいと思う。それにプラスしてお茶やお菓子や、子どもも見てもらえるわけだから、お金をかけていただけているとお母さんたちも感じると思う。そこでいくと、子どもから目を離して作業ができるというよりは、完成品に重きを置いているイメージでよいか。おばあちゃんたちから教えていただいて、材料費では賄えないような立派なものを作る、極めるというような形か。

説明者 極めるというほどではないが、一般的な値段からすれば高くない講師料で参加できると考えている。

委員 今回は地域の会員の方を講師として呼び出すということではないのか。

説明者 前回3回行ったときは会員の中から講師を呼んだが、助成金の申請にあたり外部の講師にお願いする。我々としてももう少し専門性のある講師の方を呼びたいという気持ちがあったので、講師の予定者は会員ではない。我々の協力ボランティアの中には、キルト作家さんや和服のリメイク作家さんなど、会費を取って教室を開いているような先生方もいらっしゃるのでは、今回はそういった方々に少しお礼を出して講師をお願いしようと考えている。今回の一番の目的は地域の繋がり、お母さんたちのコミュニケーションなので、手仕事をツールとして使いながらあの人と話した、この人の情報が聞けた、こんなことがあったという経験をしていただくことが一番大切だと

考えている。

④ セカハピ団 仙台青葉本部

委員 先ほど、「うちの団員が」とあったが、セカハピ団というのは劇団のようなものなのか。通常そういう団の運営というのは、どのようになさっているのか。

説明者 団員は少数精鋭で全員主婦であり、主に錦ヶ丘地区で活動している。私自身がシンガーソングライターをしており、そのコンサートなどのサポートをしてくださるお母さんたちが中心になっている。その中にはインストラクターをしている講師のママたちもいるので、そういった方の特技を發揮しながらも、助成金を活用してなるべくいい講師の方も呼びたいと考えている。

委員 年に2回ほどオンラインのショーをするということで、今年度は2回目に荒川静香さんをお呼びする計画だということだが、お呼びするゲストの謝金は賄えるものなのか。

説明者 荒川静香さんには去年もコンタクトを取っており、そのときは冬の回のオファーだったので北京オリンピックの関係で難しいということだった。ただ担当者の方や静香さんのコメントでは、仙台市の子育て応援イベントということで非常に温かいメッセージをいただいたので、ぜひまたオファーさせていただきたいと思っている。

委員 セカハピ団というグローバルな名前でも、統計を見ても仙台市内だけでなく日本全国、あるいは日本以外からも参加されているということはすごいと思うが、なぜ青葉区の活動助成に応募したのかがはっきり見えてこない。仙台市内の統計はあるが、青葉区で何%だったのかが出ていない。仙台市全体を対象とした事業であれば、仙台市の助成でも協働まちづくり推進事業というものがある。仙台市の応募でなく青葉区に応募したのはどういう理由なのか。

説明者 団長や副団長など全員が青葉区在住ということで、コロナ以前はリアルでの活動を青葉区の錦ヶ丘、広瀬エリアを中心にやっていた。コロナ禍になってリアルでのイベントが開催しにくい状況になり、オンラインでの取り組みということで出させていた。リアルのフェスや交流会については主に青葉区でやっている。統計の方はアンケートで青葉区という項目も作るべきだったが、今回は仙台市というくりにしていたので、そこは大変申し訳ない。

委員 ただいま話にあったリアル交流会の件だが、予算を見ると1家族500円で予算5,000円ということは、10家族、10組ぐらいを想定しているということか。

説明者 去年から大規模なリアル交流会を計画しにくい状況があり、実際去年の8月に計画したときも緊急(事態宣言)、まん延防止(重点措置)になってしまい5組程度だった。そういった事情で書いている。

委員 求められる内容もあるのかと思うが、逆に小規模でも安心して情報交換ができる場があることだけでも、近くの方々のリアルな関係づくりという観点からは重要かと思う。今回1回のみとなっているが、地域の活性化という目的でいくと大きなイベントでの楽しみや、その繋がり的重要性もある反面、2年度目の先を見据えた地域中の関係づくりの準備というような観点からすると、イベントの規模の大きさという

ことよりは、小規模であっても繋がりを作っていくことが重要だと思う。9月ぐらいまでに催しとしては完了するというスケジューリングを含めて、そのあたりの理由等があれば教えていただきたい。

説明者 交流会についてはおっしゃるとおり、内容等についてももう少し検討したい。イベントは大規模で行っているのですが、小規模の時はイベント性を少し排して、お母さん方との交流の時間をもちたいという気持ちがある。お子さん連れという部分があるので、お子さんも楽しんでもらえるようにするとイベント性が高くなってしまいが、地域でのお母さんたちとの交流の拠点になりたいという思いがある。

今年度、9月までになっているのは、団長である私が9月以降家庭の事情で予定が組めず、10月以降は団体の活動ができないためである。3年間は事業を続けていくという思いは変わっていない。

委員 オンラインイベントでこれだけの反響があり、対面での交流会への参加を躊躇する方が多く対面での人数を減らすのは当然のことだと思うが、もう少し小規模のオンラインイベントがあってもいいと思う。逆に言うと限定したお母さんたちが交流できるZOOMイベントみたいなものがあれば、そのあとリアルでも会えるような繋がりがオンラインでも持てると思う。これだけ立派な方がいらっしゃるので人数を減らすのは大変かもしれないが、オンラインでも青葉区のお母さんたちで大規模に交流した後に、月齢ごとに部屋を分けるなどグループ分けして、そのあとリアルのどこかで会えたらみんなでつながれるような、オンラインを中心とした交流イベントもあるとすごく魅力的だと思う。今から企画するのは大変だと思うので、来年も含めて検討いただければと感じた。

委員 2点ほど意見というか、ご検討いただければという点がある。デザインや配信などということで外注委託ということだが、こういうオンライン生活がある程度中長期化するという想定であれば、こういうところを何らかの形で自前化していくことはできないか。団員の方の人数が限られているという話だが、そういう自前化していく部分をご検討いただければという点が1点。

もう1点は、助成終了後にオンラインイベントをチケット制にすることを考えるということだが、現状の交流会の方も参加費を取られるということであれば、オンラインイベントについても一定の参加費を取ることも考えていいと思う。この2点をご検討いただきたい。

⑤ せんだい21 アンデパンダン展実行委員会

委員 一つ確認したい。このせんだいアンデパンダン展を青葉区の助成金を使ってやる意義というのはどこにあるのか。

説明者 先ほども触れたが、今回は11年目ということで、今後は一番町など、より街の中の展開を考えている。今までは文化の助成金を受けてやっており、どうしても文化芸術が好きの方が主な対象となっていたが、最近は商業施設などでもSDGsということで、技術やアート、文化などを一緒にやっていきたいという声をよく聞くので、それに対して社会やまちとの関わりを強く意識していきたいということもある。コロナの状況

もあり、美術に興味を持ってくる方からも、生活がうまくいっていないとか、貧困問題や食料の問題に関わる話を聞くことがある。問題として社会との関わりが少なく情報がない、知り合いがいないから何も情報入ってこないという状況もあるので、一番町商店街のような地域の方たちとより関わりながら、色々な人とやっていけたらということでも応募させていただいている。

委員 予算のところで参加費が 620,000 円とあるが、誰が何人くらい支払ってこの額になるのか。

説明者 毎年参加費が 1 作品 3,000 円、2 作品は 5,000 円になっている。作品を出す他にパフォーマンスの日が 1 日あり、パフォーマンスも出す場合も 2 点の扱いで 5000 円になっている。コロナの時は少なく 180 組だったが、通常は 220 組ほど参加されるので、200 組くらいということで 620,000 円としている。

委員 会場費が 743,000 円となっているが、これは 2 週間借りてこの値段になるということか。

説明者 仙台のギャラリーの相場が大体 1 週間で 10 万から 12 万ぐらいなので、2 週間でそのぐらい支払って借りている。

委員 質問とコメントが 1 点ずつある。参加者というのはおそらく出展をされた方だと思うが、屋外のところもあって難しいかもしれないが、観覧される方の人数は大体どのくらいなのか。

別のところで委員をしていたときの話だが、仙台市は美術館や博物館、科学館などの施設が点在しているので、どういうふうに回遊性を作るかという議論があった。青葉区というところだと考えると、中心部ということで回遊性はつくりやすいと思う。まち歩きを促せるようなチラシやパンフレットか何かをお作りいただくと良いと思う。例えば建物でも歴史的な建物があり、それから定禅寺通りなどにはオブジェもあるので、そういうところとの繋がりというものをつけられるといい。そうすれば経費の面で場合によっては、回遊性をつくることで潤うような商店街などからの協賛金などもいただけるといいのかなと思う。

初めの質問の部分について、どれくらいの方がご覧になられているのかを教えてください。

説明者 会場が多くそれぞれを行き来している人が多いので正確な人数はわからないが、1 ギャラリーあたり大体 2 週間で 1,500 から 2,000 人ほど来ている。トータルで 3,000 人ぐらいの規模で来ている。200 名以上の参加者がおり、そのご家族や親戚の方などが 1 人のアーティストに対して 10 人とか 20 人という人数で来ているので、そのような数になっている。

委員 震災後から 10 回の開催ということで、毎年 200 組前後、かなりの方が出展していると思うが、今までは助成金はどこからいただいていたのか。

説明者 仙台市市民文化事業団から頂いていた。

委員 他団体の助成金にも申請予定とあるが、この団体がわかっているならば教えていただきたい。

説明者 野村財団などの文化助成を予定している。

- 委員 運営アルバイトで8万円の計上があるが、人数はどのくらいと見ているのか。
- 説明者 ギャラリーの状況にもよるが、搬入や搬出の時に1ギャラリーに対して1名から2名なので、20名ほどである。
- 委員 お話を伺い、一貫した活動のポリシーが変わらずにおられると感じている。ご発表の中で若者の交流の機会不足、社会からの孤立分断という視点があったが、10年取り組まれてきて、実際に出展や来館といった参加者を見てきて、肌感覚でそのあたりの変化があるか、もしお分かりならば伺いたい。
- 説明者 最初は普段から美術に携わっている方が多かったが、3回目ぐらいからはそうでない方の参加が増えている。下は5歳6歳から、上は100歳までの方が参加されている。参加した方が知り合いを誘ってくれたり、普段はギャラリーに来ないような方も来ていたり、お母さんが参加して子供も参加したいというような方もいらっしゃる。普段は趣味でやっておりあまり発表しない方が、ここでの発表を1年間楽しみにしているというお便りをいただくこともある。半分ぐらいはそういう方だと感じている。
- 委員 参加へのハードルを低くしたり、街中での取り組みやまち歩きという観点からすると、よくある手法として例えばウィンドウの一角や、お店の軒先を貸していただくような展示の方法もあると思う。あまり展示に色々な方の手を煩わせずに、慣れているところで一定程度展示のクオリティや見る環境を担保するのも大事だと思うが、まちづくりという観点での組み立てを考えるのであれば、そういったまち歩きを応援する環境づくりに参加もできるような視点もあるのではと感じる。
- 説明者 自分も普段から美術の仕事をしているので、アンデパンダンみたいに間口が広くはないこともいろいろ考えて行って、その中で間口が広いことも一緒にやることによっていろんな方に来てもらい、そういうことがあることを知ってもらって、他の事業やそのまちの楽しみも知ってもらえればと思っている。

⑥ 定禅寺リビングストリートプロジェクト

- 委員 定禅寺通というのは仙台の顔だと思うので、その活性化というのは重要なミッションだと思う。努力が実を結ぶことを祈っている。
- 予算のところで確認したいが、チラシの製作が去年は10,000円ほどだったのが90,000円に上がっているが、これは何か理由があるのか。
- 説明者 去年はコロナ禍が続いているということで、7月にマルシェを何とか開催したが、そのチラシをその時に1,000部作った。今回はマルシェも増やしたいということと、2,000部ずつ刷りたいということでこういう金額になっている。去年が少なかったということと、告知をする上ではこのぐらいが妥当だと考えて計上している。
- 委員 これは印刷会社か、それともオンデマンドの業者か。
- 説明者 オンデマンドの会社である。

⑦ 一般社団法人 IKI ZEN

- 委員 3年目の事業ということで、助成が可となれば来年が最後になるが、助成が終わった後の資金繰りについて何か考えていることはあるか。

説明者 去年弊社の別事業の方で楽天と環境省のSDGsの事業があり、仙台市をモデルケースにしたいということでやっていたので、そちらで交渉する余地はあると思っている。活動の核となる音楽に結びつけて社会問題を共有できる場にしていきたいので、色々なことを考えながら資金繰りしていきたいと考えている。あとは入場料や出店料など、今は助成を受けて抑えているところもあるので、そのあたりの見直しをして進めていきたいと思っている。

委員 ずっと課題になっていた外国人向けの情報発信、コミュニティづくりというところで、まだコロナ禍が続いており厳しい感じはするが、そのあたりは何か見直しはあるか。

説明者 情報筋からいろいろと聞く限りでは、やはり出歩くことが控えられており、さらに今回の（ウクライナの）騒動でいろいろなことが出てきているので、正直なところ不透明ではある。ただ働いている方や留学生の方がいるのは確実なので、すぐに結果が出なかったとしてもアプローチは続けていきたいと考えている。

委員 スポンサーの獲得に苦労されたということと、マルシェや出店をするときの飲食に関するところに関して、コロナ禍での今回の開催や次年度などで何か工夫をしていくところはあるか。計画書はそこを広げる予定でいるとなっているが、予定通りいくのか心配するところでもあるので、今年度考えていることが具体的にあれば教えていただきたい。

説明者 保健所や消防局の許可の関係で、今まではテイクアウトの出店がメインであった。本来であれば飲食ブースを出店したいところではあるが、まだオミクロンが落ち着いていない中でやるとは言い切れないところがある。また出店者数に関しては身内にしか声をかけられていなかったところもあるので、今年はSNS広告を含めて情報発信をしながら出店者を募っていきたいと考えている。

委員 参加人数は大体何人ぐらいと想定しているのか。イベントの入場料も取っており、昨年よりは多くなっていると思うが、予算として何人ぐらいを想定しているのか。またそういったところの広報活動はどのようにしているのかをお聞きしたい。

説明者 昨年度までは天気の兼ね合いと、あとはコロナの関係で延期になったこともあって情報発信を上手くできなかったこともあり、60名前後の入場である。今年度はSNSなどの発信を使ってさらなる集客を見込もうと思っている。大体100名から130名程度を目指したいと考えている。

補足として、SNSとインターネットの話ばかりになっていたが、イベントをする際には、作ったチラシ等々を街中のお店に置いてもらったりもしている。その際にSNSでお店の方の紹介をするなど、街中の経済のことも考えながら動いていた。SNSをツールとして使いながらもそれだけではなく、コロナの状況でコミュニケーション不足のところを補完していければというところもあるので、現実の方とも向き合いながらやっていきたいと考えている。

委員 パネルを展示して社会問題の関心や共有を図るということで、今度はSDGsと防災減災というお話が挙げられているが、年度で2回DJイベントをしているということで、1回ごとに取り上げるものを絞った方が参加をされた方の深まりも得られると思う。

色々な切り口で色々なものがいくつもあればきらびやかにもなるが、どうしても広く浅くなってしまう部分がある。SDGs も防災減災も幅広い概念であるので、問いかけ方の工夫をするとイベントに参加をした人が考えるきっかけとして意味があるものになると思うので、その点ご検討いただければと思う。

説明者 散漫になってしまうところもあると私の方でも思っている。明日から仙台市の防災国際会議の方に SDGs さんも出ているので、そのあたりとの情報のリンクも含めながら進めていきたいと思う。

⑧ 栗生の民俗をたずねる会

委員 まずは冊子が完成してよかった。熱量がずっしりと重い冊子になったと感じる。後で拝見させていただきたいと思う。今回の予定ではウェブサイトの構築が大きな柱ということで、すでにいろいろ情報交換を進めているということだが、支出のところサイトにデザイン一式とレスポンスコーディングという品目があるが、これはどういうことなのかを教えていただきたい。

説明者 相談している印刷会社が栗生小学校の PTA 会長であり、栗生小学校の栗っこネットワークのホームページも制作していただいているので、そういうところで見積りを出していただいた。私も言葉の意味については詳しくは存じ上げていない。

委員 結婚式の再現という話があったが、実際に式を挙げられる方を公募するなどしてみるといいかもしれない。よく地域おこしのようなことで、和装で体験したいという方もいらっしゃるのではないかなと思う。このコロナの状況が収まらないことにはということがあると思うが、先の楽しみが広がってきているという様子はすごく感じた。

委員 冊子の完成ということで、素晴らしい歴史の記録だと感じる。広報活動についてであるが、例えば結婚式を再現するということになれば、メディアというか絵的にも素晴らしいものが撮れると思う。新聞社やメディア各社などに向けて、こういったのが完成したとか、こういったことを引き継ぐために活動しているというような、外向けのメディア関係の広報などはされたことはあるのか。

説明者 去年は冊子を作るのが精一杯だったので、今年はまず地元の方たちに知ってもらうことに力を入れたと思っている。折立や愛子にも市民センターがあるが、まずは地元の子供たちから始めたいと思っている。コロナ禍で再現はなかなか難しいだろうと思っているので、子供に対する訴求を考えて紙芝居を作ろうとかかいう話も出たりしている。それをネット上に公開したり、あるいは仙台メディアテークの五郎八姫のお話のようなものをお手本にするなど、まずは地に足のついたところから始めて、その後見通しが立ったらどんどん広げていきたいと考えている。

委員 まずは地域の町内会や学校関係にアプローチをしていくということか。

説明者 今の配布の段階でも冊子を欲しいという方がたくさん現れてくださっている。販売はしていないが値段を質問されたこともある。

委員 助成金を受けたものなので売ることができないと思うが、例えば CD を売るとか、今後のことを考えるとそういったことが収益に繋がるかもしれない。助成可能な 3 年間はすぐ終わってしまうと思うので、地域へ地道に広めるのと平行して、メディアに情

報提供をしていくのも続けられるといいと感じた。

(3) その他

4 閉会